

笑顔の一枚 心に届け

被災地で写真撮影に取り組み大槌町吉里吉里の高校通信制2年釜石望鈴さん(16)の写真展は25日、東京都千代田区のオリンピックパスプラザ東京シヨールームオープンギャラリーで始まる。町民の笑顔を感じ取った写真22枚を公開。27日は釜石さんとフォトジャーナリスト安田菜津紀さんとのトークイベントも開かれる。

町民追った22点

きょう「古里撮り続けたい」開幕

教育支援のNPO法人カタリバが運営する放課後学校「大槌臨学舎」に所属する釜石さん。写真展はその活動の一つとして企画された。津波で写真を流されてしまった町民に、笑顔の写真を贈ろうと昨年12月から今年3月まで約100人を撮影したことがきっかけだった。

「カメラは中学時代からの趣味。震災直後から被災した町の風景や自然をフライング越しに見つめ続けてきた。悲惨な状況でも変わることはない海の美しさが印象的だった。中学時代は人と話すのがあまり得意ではなかった。だが、写真を通じた多くの出会いが、取ること自然な表情が撮れるんです」。昨



被災地で写真を撮り続ける釜石望鈴さん

震災に向き合う心を支援 野田中 防災と併せて学ぶ



富永良喜教授(右)とともに体をほぐす生徒たち

野田村の野田中(藤岡宏章校長、生徒110人)は24日、1年生26人を対象に心のサポート授業を行った。県

年8月には安田さんとカンボジアに渡航し、現地の農村生活を体験。世界の広さを実感した。

「移りゆく古里の光景を記録するため、毎月11日に自宅から町の様子を撮影している。普通に通に暮らしていても気づかない町の良さをこ

れからも写真に収めていきたい」と前を見据える。

写真展は8月7日まで。午前10時〜午後6時(最終日は同3時)まで。トークイベントは午後2時から。日曜・祝日休館。入場無料。



大槌町の子どもたちの笑顔をつ捉えた釜石望鈴さんの作品

いなどを説明。大きな災害の記憶と向き合うために「意識的に避け続けるのではなく、少しずつ触れようとチャレンジすることが大事」と強調した。

上戸鎖飛龍君は「震災の後は眠れなかった日もあったけど、今はない。部活の試合の前などに緊張状態になるので、力を抜く方法を使っていきたい」と話した。

同日は東北広域振興局土木部が、同校で震災後初の津波防災出前講座を実施。久慈市内の被災や野田村の復興事業について説明し、津波から命を守るために率先避難者になることや、より高い所へ逃げる大切さを説いた。

「ム」スーパーバイザーを務める兵庫教育大学院の富永良喜教授が緊張のほぐし方などを講義。防災教育と併せた指導で、震災を受けた生徒の心を支援する。

富永教授は生徒と一緒に体に込めた力を部位ごとに抜いて緊張をほぐしたり、トラウマと心的外傷後ストレス障害(PTSD)の違い

同校では、防災行政無線が流れたり、津波の映像を見ると不調を訴える生徒もいるという。このため、心のケア専門家による支援のほか、生徒にきめ細かに対応しており、藤岡校長は「心のケアに関する情報を生かしながら子どもたちをよく見て寄り添っていきたい」と話す。

寺支てくんでんし